

宣教百年と無教会運動

一九六〇年三月二十六日、内村鑑三先生昇天三十年記念講演（東京、女子学院講堂にて）

矢内原 忠雄

御承知のように、プロテスタントが日本に伝道されましたから昨年が百年でありまして、宣教百年の記念の催しがいろいろあつたようです。このプロテスタント宣教百年というものが、日本の歴史の上、ことに国民思想史の上においていかなる意味をもつかということが、私のきょうのお話の主題であります。

国民思想とか国民性とか申すことは、内容が漠然としておりまして、たとえば日本の国民性はこうであると、説明することがむづかしいのです。国民性あるいは国民思想というものは変化するものでありまして、固定しておりません。たとえば日本が仏教を取り入れましたことにより、国民思想の中に仏教的要素がはいってきて、それがその後の国民性の形成に大きい影響を及ぼしたのであります。

仏教が日本に伝わりましたのが紀元五三八年であります。最初のころは、日本に渡来していた外国人の間に信じられていたものらしい。日本国民にとつては外来宗教ですから、多くの人は冷い目でこれを見ていた。迫害もあつたようです。

しかるに五八五年、すなわち仏教渡来後五十年近くのととき、用明天皇が即位されたあと、宮廷が仏教を信じ受ける態度を表明した。ことに有名なのは、用明天皇の皇子聖徳太子

（五七四年―六二三年）であります。太子は仏教学を勉強され、著書もあり、また有名な憲法十七条を制定された。

その第二条に「あつく三宝を敬すべし」とある。「三宝」というのは、仏と法と僧でありまして、仏教を信仰することを日本の政治の根柢とされた。これによつて聖徳太子は、日本の政治に倫理性、道德性を与える趣旨であつたと言われております。

それ以来、仏教は宮廷の保護のもとに栄え、聖武天皇、光明天皇のごとき仏教をあつく信じ、保護した方も出ました。

飛鳥・奈良時代の仏教が主として宮廷および僧侶の宗教であり、また戒律を重んずる小乗仏教であつたに對し、平安時代になりますと、最澄、空海という、ふたりのえらい僧が出て、それぞれ天台宗と真言宗を開きました。これまでの仏教が主として都市と寺院と戒律の宗教であつたに對して、山に寺を建て、心の糧としての信仰を民衆の間にひろめ、また土木・治水・医薬・教育等の面において民衆の困難を救う努力をしました。また「鎮護国家」といひまして、国を守るものとしての仏教の位置づけをいたしました。これによつて仏教は民衆の間にひろまつていったのです。

それから鎌倉時代になりますと、法然とか親鸞とか日蓮などの新しい日本仏教が起つた。これらの人々は既成仏教の代表者と、これを保護する政治権力によつて弾圧されました。法然も親鸞も日蓮も流罪にあつております。流罪にあつたことによつて、これらの民衆的な信仰が地方に広まる機会を得たのであります。こうした仏教の普及は、善かれ悪しかれ、日本の国民性を形成する上に大きな役割をしたのです。

日本民族の固有の国民性が何であるかを説明することは困難ですが、たとえていえば清浄な白紙のようなもので、外から来るものを何でも受け入れるという素質をもっている。しかしこれは気分とか心持ちとか、要するに感情的なものでありまして、これという思想というものがない。「神」といつても、目上の者はすべて「カミ」であつて、人間と神との間に本質的な区別がない。すなわち本来の意味で宗教というものがなかつたといつてよい。このような白紙状態の日本民族に対して、ともかく「思想」と「宗教」を与えたものは仏教でありました（儒教や道教を別として）。そして千年もの長い間仏教が日本国民の間に浸透した結果、仏教的な物の考え方、感じ方が、その長所短所ともに日本の国民性の内容となつて来たのであります。

2

ところで、戦国時代の終からキリシタンの活動が始まりました。フランシス・ザビエルが最初のカトリックの宣教師として鹿児島に上陸したのが一五四九年です。それから秀吉、家康、家光などの弾圧政策が続きまして、ついに島原・天草の乱が起つたのが一六三七年。オランダ船以外一切の外国船の入港を禁じる鎖国令が発せられたのが一六三九年です。一五四九年から一六三九年まで、百年に足りない。この九十年の間に、カトリック教は日本の国民性を形成する上にいかなる足跡を残したか。日本の国民思想の発展の上になどのような影響をもつたか。ザビエルは各地で仏教の僧侶と対決をいたしました。神というものはただ一つ。天地万物の造り主であ

るただ一つの神がおられるということ、主イエス・キリストの十字架のあがないの血によつて人の罪がゆるされるということ、この二つを主として説いた。仏教の僧侶はこれに對抗できず、たじたじとなつた、と記録に伝えられている。

この九十年のキリシタンの伝道が、どれだけのものを日本の国民性に寄与したかということについては、私は何もいうことはできません。大名たちがキリシタンに興味をもつたのは、彼らの輸入した西洋の文明と技術に心をひかれた点が少なくなかつたと思いますが、徳川幕府の考案したあの残酷ないろいろの方法による迫害に拘らず多くの信者が信仰を守り通し、よろこんで殉教の死をとげたということは、日本民族の血の中に宗教信仰を受け入れる崇高な精神が流れていることを証明するとともに、これほどの感化を彼らに与えたキリスト教の伝道の力を示すものと思います。

しかしキリスト教の考え方が果して日本民族の間に広く、深く、また後世にのこるほどの力をもつて浸透したかという点になりますと、ひどい弾圧と迫害によつてキリシタンは消し去られたのですから、はつきりしたものはわかりません。一八六四年フランスのカトリック宣教師によつて長崎の浦上天主堂が建立されたとき、浦上村の「かくれキリシタン」の信徒が現れて人々を驚かしたのですが、これはきびしい禁止令の下において、二百年以上もかくれて信仰の形式を保つて来たというだけのことでありまして、彼らの生活感情や生活態度や社会思想や精神力の上において、キリストの生きた力が保存されて来たものではありません。今日なお平戸方面に「かくれキリシタン」の部落がありますが、その人々の生活は形の上でいくらかカトリック教を保存しているだけで

ありまして、生活そのものはすこぶる積極性。進歩性を欠くものであります。ともかく、神の摂理によつて、カトリックの活動は九十年をもつて終止符をうたれました。

3

その後幕末開港にともない、プロテスタントの宣教師が日本に來まして、昨年で百年になった。百年間のプロテスタントの宣教によつて、日本の国民性はどれだけのものを得たか、それは日本の国民思想の形成に対していかなる役割を果たしたか。これもなかなか評価するに困難な問題であります。

仏教でもカトリックでも、日本に入つて來たとき、その伝道者・宣教師は新しい宗教の宣教師であると同時に、新しい文化の担い手として迎えられました。新しい宗教の伝道は、新しい文化の輸入になわれて、日本国民の間にひろまりました。そのことは明治初年におけるプロテスタントについても同様でありました。プロテスタント信仰の宣教のほかに、教育・文化・社会事業・社会運動、それからスポーツ等の面において、プロテスタントの活動が日本に新しいものを始めたことは決して少くないのです。しかしこれら世俗的の事からは、その性質上キリスト教会でなくてもできる仕事であり、そうして日本においては明治維新後國家がみずからこういう方面の仕事をいとなみ、あるいは奨励しました。政府および民間の活動によりまして、キリスト教会そのものは、西洋文化の輸入者としての影は薄くなるというか、だんだん必要が少くなつて來たのです。たとえば明治の初めにおいて英語を習おうと思えば、宣教師の所へ行くことが早道であつ

た。今、英語を習おうと思えば、宣教師に行かなくても、その辺にたくさん学校がある。

そこでプロテスタントの信仰、あるいは宗教としてのキリスト教そのものは、宣教百年の活動の結果、どれだけ日本国民の中にしみ込んだであろうか。新しい日本国民性の形成にどれだけ寄与したであろうか。仏教傳來の時とちがつて、皇室も政府もキリスト教を受け入れようとはしませんでした。キリシタンの場合とも異り、大名諸侯に相当する支配階級がキリスト教を信じ受けようとしなかった。かえつて政府も民間もキリスト教は天皇を神とする日本の国体に反するという理由で、これを排斥した。殊に学界、教育界にその風が強くありました。一般民衆も、その長年養われて來た神社仏閣の信仰が、すでに形式化して精神的生命力を失つていくにわかかわらず、因習的にこれに拘泥して、キリスト教に心をとぎしました。そのためプロテスタント宣教百年を経過した今日、九千万の国民の中で僅か百万たらずの信者であります。量的に言つて、それほど多く国民の間にしみ込んでいるとはいえない。それならば、質的に言つてどうだろう。「なんじらは地の塩、世の光である」と言われるが、果して日本のクリスチャンは地の塩、世の光としての役割を果して來たであろうか。太平洋戦争の時はどうだったか。戦後日本の民主化が始まったが、民主主義の根本である人間の人格の尊重と責任の觀念が日本国民の間に十分植えつけられていないために、制度の改革はできても、本当に民主的な人間というものに欠乏しているのが日本の現状でないか。少数の例外はあるとしても、この百年間キリスト教が日本国民の中にしみ込んで、民

主的性格を形成する上に影響した程度というものは案外少いように思われます。

そういう意味からみると、プロテスタント宣教百年は失敗の歴史であったとも言える。ことごとく失敗とは言いませんが、日本の国民性を形成し、日本国民のたましいを揺り動したことにおいて、キリシタン九十年の活動に比べ、あるいは仏教伝来当時の八十年に比べて、目覚しい活動であったとは言えないような気がする。

その原因は何であろうか。日本国民がすでに数世紀にわたる仏教と儒教による思想的訓練をもつていたため、外来の宗教であるキリスト教に対して抵抗した。ことに明治政府の思想政策として、天皇を神として拝むような教育をしましたために、なおさらキリスト教を排斥したという事情もあるでしょう。けれどもそのような抵抗と迫害は、新しい信仰を入れる時にはいつもあることとして、その抵抗に打ち勝ち、弾圧に抗することによって、新しい信仰は国民の中にひろまり、根づいてゆく筈のものである。しかるにプロテスタントの宣教に対しては、案外迫害も少かった代りに、弾圧に抗して信仰を守るために戦うということも少かった。プロテスタントの宣教が日本の一般国民に接触する面が狭く、浸透する度が浅かったように思われる。ここに宣教百年の反省と批判があつて然るべきだと思ふんです。

4

非常におおざっぱに言いますと、日本におけるプロテスタントの宣教は、外国ミッションからの人と金によって開始さ

れ、また援助されてきました。キリスト教が日本国民の間に深く根をおろさなかつた原因の一つがここに求められると思ひます。外国ミッションから金をもたらうことは、いわゆる「ひもつき」の伝道になります。精神の独立を害する恐れがたぶんにある。経済上の事業に外資を導入するのは、借りた金に利子をつけて返済しますから、独立を害することになります。学者の研究に奨励金あるいは研究費を外国からもらひましても、それによつて精神的独立を害することはありますまい。研究成果をあげることは、学者として当然のことです。外国ミッションから伝道費を受けます場合にも、伝道成績について報告する義務がある。ところで経済や学術の場合と異り、信仰のことについては、ひとりのたましいを救うために、一年かかるか十年かかるか。一生かかつてもひとりの人を信仰に導くとは容易でないので。信仰のことは経済や学問のことと違ひまして、神のなし給うわざでありまして、人間の努力と計算で成績を挙げるといふわけにはいけません。

しかるに外国ミッションから金をもらうためには、伝道成績をあげて報告しなければなりません。そこで信仰の未熟な者にも洗礼をすすめて、信者の数を増そうということになります。これが宣教百年の間にキリスト信仰が信者の中にしつかりと根づかず、入信する者もあるが離信する者も少なく、全体として日本国民の間にキリスト教が十分根づかなかつた一つの原因となつたように思われる。

もう一つ、キリスト教が容易に日本国民の精神的風土に同化することのできなかつた理由は、その伝道のやり方が外国ミッションのやり方そのままを輸入し、あるいは摸倣して行

われたという点にありましょう。同じような教会を造り、同じような神学校を建て、同じようなサクラメントをし、外国で出来た制度と外国人の頭で考えた思想をそのまま日本に輸入しようとしたというところに、キリスト教が日本国民の間になじまなかつた原因の一つがあるのじゃないか。

仏教が日本に渡来した時に、中国から多くの名僧が来、日本からも中国へ多くの留学僧が出ました。しかし中国の仏教ミッションから金をもらって、日本の寺院を建て、仏教伝道を行なったということがあつたでしょうか。私はそれを知りません。僧侶になるためには、頭をまるめ、法衣をきるという形式があつたが、一般民衆が仏教の信仰に入信するとき、洗礼というような何かの形式が要求されたでしょうか。キリスト教会が要求するような、洗礼を受けなければキリスト信者でないとか、キリスト信者は洗礼を受けなければならぬとか、そういう問題で信仰に入ろうとする者を苦しめた事が果して仏教にあるだろうか。

外国ミッションから金をもらったということと、外国と同じ教会のやり方で伝道したということと、これが宣教百年の努力にかかわらず、十分日本国民の間に行きわたるほどの成果を挙げ得なかつた理由ではないかと思ひます。

戦後、天皇の人間宣言があり、民主的な時代となりまして、従来あつた伝道上の障害が除かれ、一般民衆がキリスト教を信するのは非常に信じやすい事情になつてきました。終戦直後、一ころは教会に来る人がふえたが、近頃はかえつて教会を去る人がふえて来たといわれる。すなわち教会は、せつかく入つて来た信者をその中に留めておくことができなかったのです。

戦後日本伝道に着目してやつて来る米国のプロテスタント伝道隊のしぶりを目撃しますと、横腹に字幕を張つたトラックに乗りまして、メガホーンを使いまして、楽隊をのせて町を走り廻り、広場に来ればトラックを止めて伝道説教をしていた。ああいうやり方では、とうてい日本人はついてゆけません。キリスト教の信仰が日本人の心のすみずみ、性格の中心までしみ込んでゆくことはできない。

宣教百年を記念するために開かれた行事そのものが、米国から巨額の金を持ち込み鳴り物入りで、はでなさわぎをいたしました。ああいうことでは、とてもキリスト教が日本人の心の信仰になることはできない。

5

プロテスタント宣教百年を回顧いたしましたして、その中でたつた一つ、日本が外国から受けるのでなくて、日本から外国に与えるもの、すなわち世界に誇るべきものがあります。それが内村鑑三の無教会主義であります。

内村鑑三の無教会主義は、プロテスタント宣教の結果として生まれたものではないのです。これは宣教百年の産物ではありません。そうでなくて、これは宣教百年に対する批判であり、プロテスタントであるのです。百年にわたつて行われた宣教の精神とやり方が間違いであるという批判が、内村鑑三の無教会主義であります。

時間がありませんから簡単に要点だけ挙げてみますと、第一、かれは外国ミッションと関係をもちませんでした。外国

ミッションから金をもらわないということが、内村鑑三の方針であり、かれは終生それを守り通したのです

第二に、かれは教会をつくりませんでした。すなわち制度的な組織教会をつくらなかったのであります。教会とか教派とか教団とか申しますと、それ自身が宗教的な権力団体となり、宗教的な勢力をもちます。また経済上の利害をもち、それ自体の財産をもちます。カトリックの如きはその最も大きなものですけれども、このような信仰以外の政治的な権力とか、社会的な勢力とか、経済的な財産のようなたぐいのものを一切もたない。そういうことに煩わされないということが、無教会の一つの特色であります。信仰だけ、信仰のことだけ、それ以外に守るべき勢力というものはない。無教会の人数をふやそうとか、勢力を増そうとか、そんなことを考えないということとであります。

第三には、サクラメントを行なわない。洗礼その他のサクラメントを行なえば、どうしても集りが制度化して、制度教会となるのです。無教会においてサクラメントを行なわないということは、教会組織を作らなかつたということと深い関係があるのであります。人はキリストを信ずるそのことだけで救われる。信仰だけで救われるという信仰に徹底したのであります

第四には、無教会には僧侶・牧師のごとき専門的な職業的宗教家おりません。従って神学校を建てません。すべての信者が伝道の責任をもちます。無教会の者は、必ずと言っていいくらいに、自分の周囲に聖書を中心とする小さい集りをつくります。近頃外国においても平信徒伝道ということが言われますが、無教会においては、牧師の宣教とならんだ平信徒

の伝道活動ではなく、すべての伝道が平信徒伝道なのであります。

第五に、無教会は聖書を重んじます。無教会の伝道は聖書講義であり、無教会の集会は聖書研究の集会であります。これは、神の真理は聖書に示されておりまして、これを聖霊の光によつて学ぶのであります。おのおのの信者が聖書によつて直接に神から真理を学ぶことができる。いかなる権威の媒介をも必要としない。聖霊による聖書真理の直接的な受け入れを高調いたします。

第六に、無教会は教会組織ではありませんから、信者に対して一律に課せられる信仰箇条というものもありませんが、聖書に現わされた根本的真理を信ずることが正統的信仰というならば、無教会の信仰は聖書的、すなわち正統的であります。その根本的信仰は、キリストの十字架による罪のあがないと、肉体の復活と、キリストの再臨による神の国の完成を信ずることとあります。この極めてオーソドックスな信仰の中心をしつかりと把握いたしましたして、この古い古い、しかも永久に新しい純粋な福音を固く守っているのが、無教会であります。

第七に、無教会はそれ自体の利害関係をもつ団体もしくは組織ではありませんから、社会の問題について自己の利益の立場から発言するのではなく、神の御言を語るといふ預言者の立場に立つことができるのです。すなわち真に自由独立な信仰の立場から政治の腐敗を組弾し、社会の不義を批判いたします。内村鑑三が藩閥政府や財閥を攻撃したり、絶対非戦、軍備反対を唱えたのも、かれの無教会の立場においてでありました。かれが教育勅語の巻物に対して最敬礼をしなかつたの

も、人の尊厳、人間の自由の根柢をなすプロテスタント信仰に徹していたからです。

第八に、無教会は日本人の頭と心、口と手と足とをもつて、イエス・キリストの純粹な福音を聖書から直接に学びかつ伝えるものでありまして、外国人の頭と外国人の言葉でキリスト教を受け売りするものでありません。こうしてキリスト教が日本国民の間に風土化し、一般民衆の間にしみ込み行き渡る唯一の道を開いたものが内村鑑三の無教会主義であります。

6

今日における私どもの問題は、日本の国民が民主的国民として偉大な民族となるためには、一人一人の日本人が真に民主的な人間とならねばなりません。日本国民の国民性がそういう内容、そういう傾向にむかつて新に形成されて行かなければなりません。それは神社や仏教や儒教では、果すことのできない問題であります。そのためにはどうしてもキリスト教の信仰と思想をとり入れなければならぬのです。

日本の政治の状況を考えてごらんなさい。社会の状況を考えてごらんなさい。戦後十五年たちまして、この民主化ということが、日本国民の間にまだ板についていません。日本国民の新しい国民性として、各人の生活と精神の血となり肉となつておりません。十四歳と十二歳の少年が自動車の運転手をナイフで刺して金をとる、そんなことの行なわれている社会です。太平洋戦争の戦犯をもつて責任を問われた人が、日本の総理大臣になつている。国は安保改定によつて、再軍備

の方向に進もうとしている。文部省の教科書検定には、思想統一の徴候がないとは言えない。政党も労働組合も派閥の争いに明け暮れしている。日本の民主化も平和運動も声は大きいけれども、国民の思想と生活の中に何か大きいネジが一本足りないことが感じられる。それは何だろう。われわれの立場から言いますと、それはキリストを信ずる信仰が、新しい国民性をつくるまでに日本国民の間に行き渡っていないからだ。しみ込んでいないからだ。だから民主主義の根本である人間の自由ということも、人間の責任ということも十分身につかないままに、民主主義の制度とかけ声とだけがあるのだ。その中で日本の学問も経済も政治も社会もみなから回りしている。真の平和も真の民主主義も、キリスト教の信仰と思想を植えつけることなしには、日本人の間に育たない。

国を愛するもの、国民を愛するものは、どうすれば日本の国民を偉大な国民となすことができるか。底力のある強靱な道徳性をもつた国民となすことができるか、ということを考える。そのためには国民がキリストの福音を受け入れること以外に道はない。内村鑑三がそう信じ、そう主張し、そう戦つたように、かれの門下生であるわれわれも、キリストの福音を受けいれる以外に日本国民の救いはないと、叫び続けるのであります。

中沢治樹君が最初にブルンナー教授をもつて講演を始めましたから、私もブルンナーをもつて話を閉じたいと思います。ブルンナー教授が『福音主義神学』という雑誌に「日本の無教会運動」という論文を出しました。教授の許しをえまして、私どもで翻訳をいたしました。その論文の最後にこういうことが書いてある。

「無教会には分派的精神はほとんど少しも認められないのである。それ故この運動は、全く広くかつ自由にものを考える人々をひきつけることができた。その創始者すなわち内村艦三が広く自由にものを考える人であり、イエス・キリストの恩恵の福音に基づいて自由と寛容のために戦った人であったように。」

無教会運動が将来をもつかどうかという問題について、

「私(ブルナー)自身はすでにこれが唯一の純真に日本的なものであり、輸入されたものでないキリスト教的集団形成の形であるという理由から、その前途について疑を抱かない。」

最後にこういうことを言っている。

「何が真のエクレシヤ、真の信仰共同体であるかという認識は、このサクラメント的僧職制度を克服するであろう。プロテスタント教会はただ信仰による真の兄弟の交りという意味に教会制度を変革することによってのみ、更に存立を続けることができるであろう。この点で日本の無教会運動以上に良い例は、今まで一つも示されなかった。その故に無教会運動は日本に対してばかりでなく、全キリスト教界に対して意味をもつのである。」

これはブルナーが昨年書いた論文の結論であります。日本に対してのみならず世界の全キリスト教界は日本の無教会運動を手本として、進んでゆくべき道をそこに見出すだろう、と申しているのです。

プロテスタント宣教百年の間に日本が産出した世界的寄与は、これであります。それは同時に日本国民を救う唯一の道でもある。今日内村艦三先生の昇天満三十周年を記念いたし

まして、われわれの負っている任務がいかに重大であるかということを、今さらのように認識するのであります。

(『嘉信』第二十三卷第六号、第七号・昭和三十五年(一九六〇年)六月、七月)